

# エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第120号(通巻第180号)  
2014年3月13日発行 発行人：清水武志朗 編集人  
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山  
複合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は  
常駐していません) e-mail qqh43fdd@train.ocn.ne.jp  
URL <http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp>

## 大妻女子大のビオトープ管理士育成教育



黒瀬奈緒子准教授による発表

2月22～23日に開かれたく多摩エコ・フェスタ2014>では、「やさしい環境学習講座」として市内3大学の環境や地域に関連した取り組みが、いずれも女性准教授によって発表された。今号ではその内容の一部を、振り返って再現してみたい。まず最初は大妻女子大学の黒瀬奈緒子先生による同大の「生物多様性創出と野生動物保護管理を目指すビオトープ管理士育成教育」。

それではまず「ビオトープ」ってなんだろう。正しくは「地域の生き物たち(Bio)が生息する空間(Top)」を意味するドイツ語で、人工的につくった自然という意味ではないとのこと。ビオトープの最低条件は、小さくてもその地域の自然の一部として、地域全体との調和のとれた関係を保っていること。

地域に昔から住んでない種ではない野生生物が野外に逃げ出すと、たとえばアライグマやハクビシンのように侵略的外来種となり、自然環境を劣化させる悪影響のひとつとなる。

ビオトープとは、われわれの身近にある森や雑木林、草原、河川、干潟など様々な場所のこと。わたしたちは自然の恵み＝生態系サービスに支えられて生きているのだが、その自然の恵みを与えてくれるのが健全な自然。よって、その土台となるビオトープを自分たちの意思で守り育てることが必要だ。これらは生物多様性保全、野生動物保護管理につながっていく。

生物多様性には3つのレベルの多様性がある。①生態系の多様性とは、農業、森林、海洋など様々な生態系が存在することをいう、②種の多様性とは、様々な種類の動物、植物などが生息・生育していることをいう、③遺伝的多様性とは、同じ種のなかでも個体ごとに遺伝子が目立った黒瀬ゼミのブース 様々に異なっていること。

この生物多様性を危機に追いやる原因としては、1) 生息地の消失(破壊と分断化)、2) 生息地の悪化と汚染、3) 乱獲や



資源の過剰利用、4) 外来種の移入、5) 病気の蔓延などがある。もっとも大きな原因は1)だ。

たとえば、人間の土地利用によって植生が改変したり消失した動物の頭骨に子どもが驚くりする。土壌の流出は餌動植物が消失し、生息地の消失につながる。



ビオトープによる都市の保全とは、都市部では人工的な土地の利用が優先され、生態系の破壊が著しいため、かつて存在した生態系の回復が保全の課題となっている。生物の生息する場所(ビオトープ)は、地理的に見てそれ以上細かく分けられない最小単位。それは生物の生息地を構成する「部品」ともいえる。

だから、ビオトープを用いた保全とは、部品を揃えて多様な生物が生息できる環境を構築する方法のこと。部品を寄せ集めて、生き物ネットワークをつくろう!

大妻女大はビオトープ管理士資格試験の「一部免除認定校」になっている。管理士にはふたつの専門性の異なる部門があり、「ビオトープ計画管理士」と「ビオトープ施工管理士」がある。計画管理士とは、広域的な地域計画(都市計画、農村計画など)のプランナー。施工管理士とは、設計・施工にあたる事業現場担当の技術者のこと。

これがさらに1級、2級と難易度によるふたつの階級に分かれる。2級は基礎的な知識のある技術者レベル。1級は経験の豊富な事業の責任者レベルとなる。

同大では、2年生から都市計画や環境法、そして生態学などについて講義で学ぶ。3年生でビオトープ論で知識を習得。生態観察実習で実際に野外に出て、いろいろなタイプのビオトープで環境評価・調査・維持管理法を学ぶ。9月に試験があり年末に合否判定が行われるので、3年生で資格取得が可能という。今後、「りけ女」や「ドボ女」につぐ「バイオ女」の多くの誕生が待たれる。

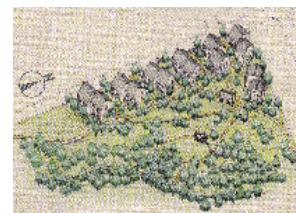
このほか、同大3カ所に設置されているビオトープや近くの小山田緑地に設置された野生動物撮影用のカメラによる撮影成果なども公開されたが、それらは別の機会に。

## 里山景観を共有するわが家づくり

2月22日のエコ・フェスタの出展者によるトークでは、NPO法人・南山の自然を守り育てる会(稲城市)のコーポラティブハウス建設の話がユニークだった。

これは「里山の開発反対」だけを叫ぶのではなく、逆に多くの住民が里山を共有して楽しむ家を建てて、景観を楽しんだり守っていこうという取り組みの提案。

2戸で1住宅のセミディタッチハウスという方式の家を7棟(14戸)建てる。延べ床面積は約90㎡。参考予算は約4500万円。入居希望者たちが建設組合を結成し、その組合が主体となって土地の取得、建物の設計、工事の発注などを行い、住宅を取得し管理していく。前に広がる里山には果樹と菜園のコミュニティや、散歩が楽しくなるフットパスなどが整備される予定。2017年ごろの竣工、入居を目指す。詳細は：<http://ina-mina.com>→完成スケッチ



## 多摩エネ協「次世代リーダー育成プログラム」



多摩清掃工場とごみ発電の見学会 多摩循環型エネルギー協会では、今後の時代を見据えて、地域でエネルギーや環境問題に取り組む人材を育てようと、8大学17人の大学生や大学院生を対象にした「次世代リーダー育成プログラム」を展開している。

これは、学生たちが自ら企画を立てて提案し、これを実際に行って社会との接点を知ったり、達成感を身につけることで一段と彼ら自身のレベルを上げようというもの。わからないとき、困ったときなどは「メンター」と呼ばれる周囲の社会人に相談し、企画がスムーズに進行するようなこともある。

月に1回、報告会・研修会を開き、進捗状況などの情報交換を行うほか、夏合宿なども行ってリーダー同士のコミュニケーションを深め合っている。

多摩大学3年生の長間祐一さんは昨年12月、企画・実施したのが「多摩ニュータウン環境組合多摩清掃工場のごみ発電施設の見学&参加者同士の交流会」。エネルギーの普及・啓発イベントのいわば「学生版」。地元のエネルギーや環境に対する活動の現場を見たり、考えたりすることで、3.11以後、何か行動したいと思っていた学生の参加者が行動するきっかけになればいいとの思いもある。

企画内容を「ごみ発電」にした理由は、ごみというものが自分たちの日々の生活で毎日、生み出されているごく身近なものだったからという。ごみの焼却を利用して発電を行うということは、効率的で持続的に地域の電力を賄える発電方法ではないかと思った。

実施当日は、清掃工場の受け入れ日程の関係で平日となり、参加者はメンターを含めた社会人19名、学生3名の計22名と、学生数が少なかった。こういう「日程的条件」も、企画段階で考慮に入れておかなければならない要件だ。

見学を終えたあとの交流会では学生から、小学校のころに行った見学会とは違い、ただ見学するだけでなく、ごみが及ぼしている様々な問題や課題を知ることができた、などの感想が話された。そして、参加者がふだん行っているエコ活動や環境・エネルギーについて問題意識や、取り組んでいることなどの共有を行ったという。

長間さんがこの次世代リーダー育成プログラムを通して学んだことは、ひとつ目はエネルギーについての捉え方。以前はエネルギーをどのように生み出すのかだけを考えていたが、その先のエネルギー消費を減らすためにはどうすればいいのか考えていく必要があること。

ふたつ目は、協力してもらうことの大切さ。企画を進める上で最初は全部自分で抱



え込んで全然進めずにいたのだが、そのことをメンターに指摘され、協力してもらいたいとメンターに相談した。そ

の結果、見学先との交渉や参加者集めなどを手伝ってもらい、無事に企画を終えることができたとのこと。

もう一人の多摩大生、小菅慧さんは2月1日の「エネカフェ」（エネ協が開いている勉強会）で「多摩ニュータウン地域の現状と将来あるべき多様なエネルギーについて考える」というテーマの発表を行った。これは多摩市で使われている総電力消費量を調べ、そのなかで多摩電力合同会社の発電量（2カ所・86.4kW）がどのくらいの割合になるか調べたところ、0.01%。そして多摩電力の目標発電量（3年・2000kW）と市の新エネルギー機器導入補助制度を使って発電している市民分、多摩市の公共施設で発電している電力量を足してみると0.32%になった。

太陽光では天候に左右されるため、ほかの電源はないかと考えたところ、天然ガス・コージェネレーション（熱電併給）、地中熱、下水道・下水熱、太陽熱、産業用燃料電池（Bloom エナジーサーバー）などによる発電や熱利用の紹介を行い、参加している人たちに投げかけた。

まとめとこれからということで、①多摩市の進める環境政策、②多様なエネルギーの可能性、③エネルギーの地産地消、④市民が進める再生可能エネルギー（太陽光発電）、⑤太陽熱、地中熱、コージェネ発電の可能性、⑥地域エネルギーの安定化、などで企画の発表を終えた。

この企画で一番伝えたかったことは、多摩市内で発電を行っている多摩電力や各家庭で行っている太陽光発電、市の公共施設などの太陽光の発電と、多摩市の年間電力消費量を比較したときに、どの程度自分の地で電力が賄えるか、ということだったそうだ。

以上の二人のほか、3月1日の読売新聞では、同プログラムに参加している恵泉女学園大学1年の神崎恵里花さんが、市立東愛宕小学校で環境教育に取り組んでいる姿などが紹介されていた。（協力：多摩循環型エネルギー協会）

## フクシマを忘れないアクション in TAMA

3.11の東日本大震災から3年を迎え、福島は東京電力福島第一原発周辺ではいまだに過酷な状態が続いているが、当地ではる3月9日、3.11 フクシマを忘れない 原発のない未来を TAMA実行委員会の主催する集会在11時から多摩センター地域で行われた。

集まった参加者はおよそ150人。12年3月の初集会からはかなり人数が減ったが、今回は事前の呼びかけのタイミングが遅れたのも一因だったようだ。

多摩中央公園の池畔に集合した一行は、原子力を象徴する黄色い帯を身につけ、多摩センターの商業ビルのあいだを「われわれは福島のことを忘れないぞ〜」、「子どもたちの命を守ろう〜」などとシュプレヒコールをあげながらデモ行進した。

最後に京王プラザホテル横で、フォトジャーナリストの桃井和馬氏ら数人がショート演説を行い、うち参加できる人は12時30分発の小田急線 多摩センターの街中をデモ・多摩急行で、この日、日比谷野外音楽堂で行われた大集会「NO NUKES DAY原発ゼロ☆大統一行動」に参加した

